

スペイン語の接続法について

スペイン語学習におけるよりわかりやすい「叙法選択教示法」の一試案¹

三 村 友 美

On the Subjunctive Mood in Spanish

Yumi MIMURA

2019年11月8日受理

抄 録

日本語話者へのスペイン語教育において、既習の英語学習の際にはなかった、スペイン語学習ならではの注目事項として、「叙法選択：直説法と接続法の使い分け」が挙げられる。これに関して、画期的な分析とまとめを行った和佐(2005)の分析を紹介・分析しつつ、そこに筆者自身の教育現場経験も併せて、より効果的な「西語習得のための『叙法選択教示法』」の提示を試みている。

キーワード：スペイン語中級文法・叙法選択・接続法・実現性の度合い (Realis / Irrealis)

0. スペイン語学習の最大難関 直説法²と接続法³の使い分け

「西語を学ぶ際の最大の難関とされる接続法

(…中略)「事実を客観的に述べる」直説法に対して、接続法は「話者の主観に関連付けて事象を述べる」というのが一般的な説明」

「スペイン語 文法と実践」(pp.187)

日本語話者のスペイン語学習において、学習理解が困難な事項として挙げられる点に、「叙法の選択：直説法か接続法か」という事項がよく挙げられる。大多数の英語学習経験者にとってのスペイン語学習は、語彙や文法の面では既習言語との共通点も多く、「学び易い言語」だといえるであろう。しかしながら、件の「叙法選択(モダ

¹ 本稿は2018年12月19日 東京大学大学院言語学研究室「言語学演習」における口頭発表の内容を加筆修正、文章化したものである。

² スペイン語で Indicativo (英: indicative)。以後 (IND) と表示。

³ スペイン語で Subjuntivo (英: subjunctive)。以後 (SUB) と表示。

リティ表現⁴」に関しては、現代英語では、法助動詞によるモダリティ表現が主流であるため、前述のような評価を拜する事態となっている。そのような状況下において、スペイン語の叙法選択の基準をなるべく簡潔に教示・説明すべく、接続法の出現条件についての分析を試みていきたい。

1. 先行研究

1.1. 接続法の定義

「(接続法: Subjuntivo とは) 話者の頭の中で思い描いた概念【願望、感情、価値判断、疑惑】を伝える表現方法である。

「意味的観点からは直説法⁵が有りのままの現実を客観的に表す法であるのに対し、接続法は架空の事柄や、非現実的観念を主観的に述べる法だといえる。また、形式的観点から見ると、直説法は独立の法、接続法は従属の法というふうに理解することもできる」

(中級スペイン語文法 pp.335)

1.2. 従来の叙法選択の基準

日本語話者への教示としては、以下に挙げる3点が従来の「スペイン語における叙法選択の基準」とされてきている。

【基準①】 実現性の度合い (Realis / Irrealis)

1.1 で示した接続法の定義にもあるように、この尺度は、叙法選択の重要な要因である。

なお、Realis / Irrealis という術語の定義に関しては、Talmy(1994)の定義「話し手が現実世界において事実であると認識した(あるいは認識している)事態 (Realis) 以外はすべて Irrealis」を和佐(2005)も採択している。

【基準②】 話者の主張 (確信度合い)

直説法と接続法の対立のみを議論していた時代は、直説法は主張 (assertion)、接続法は非主張 (non-assertion) を表す際に用いられる、とされてきた (Terrell and Hooper 1974)

【基準③】 特定可能性

こちらは主に形容詞節中の表現に関するもので、先行詞の「特定可能性」に応じて、叙法選択が行われる。この「非特定の関係詞節」の件に関しては三宅(2013)にて、より詳細な分析がなされている。

[例文6] Buscamos una casa que esté (SUB) cerca del mar.

[例文7] Buscamos una casa que está (IND) cerca del mar.

⁴ 本稿では和佐(2005)に従い、モダリティを「発話時における話し手の心的態度を表す意味概念」とし、叙法がモダリティを表す文法手段の一つであるとする。

⁵ indicativo (英語: indicative)

なお、本稿では、以下の2点を取り上げて、分析・考察を試みたい。

【論点①】従来の「接続法 ≡ Irrealis」と現代日本語の「(ヨ)ウ」との類似性

【論点②】「接続法 ≡ Irrealis」では、扱いきれない例：話し手が Realis と感じた事態に接続法が用いられる例。

例)感情表現+接続法、aunque+接続法「たとえ～であっても」

これは、話し手が Realis と感じた事態に接続法が用いられる例で、和佐(2005)が「命題の真偽判断を差し控えるモダリティ(modalidad de reserve epistémica)」を提示して解決を試みているものである。

2. スペイン語接続法の「日本語における相当表現」:仮説「ヨウニ・ヨウナの接続法」

尾上(2001)では、日本語の古典語における「未然形+ム」という叙法形式の用法を考察し、「非現実の事態を専門に語る形式として、ヨーロッパ言語の「接続法」subjunctive moodに相当するものかどうか」と述べている。和佐(2005)においても、古典語の「未然形+ム」を起源とする、現代日本語の「(ヨ)ウ」「ダロウ」とスペイン語の接続法の対照分析が行われている。

なお、尾上は「未然形+ム」について、「話者の現実世界に存在していない事態(話者の立っている現実世界で話者が経験的に把握していない事態)を頭の中で思い描く」という述べ方である、としている。この点については、和佐も「注目すべき点として「日本語でもかつて〈推量〉〈意思〉〈命令〉〈要請・願望〉〈仮想〉など Irrealis の事態を表現する文が「動詞の未然形+ム」という専用の叙法形式で表されていたということである」と指摘している。

これらの先行研究の知見と筆者の教育現場での経験に基づき、スペイン語の叙法選択の際の手がかり、スペイン語接続法の日本語訳(或いは相当表現)の候補として、直截的断言(断定)・言明をさける「ヨウニ」「ヨウナ」という表現の妥当性について、検討を試みていきたい。

【「ヨウニ」相当語句の例】

2.1. 「間接命令(話者の意思)」

[例文1] Deseo que me traiga (SUB) un regaloito.

「彼が私にお土産を持ってくるように望みます。」

[例文2] ¡Ojalá (que)⁶ nos veamos (SUB) en Buenos Aires!

「ブエノスアイレスで再会できますように。」

[例文3] Que venga (SUB) Juan.

「ホアンに来てもらうように」

[例文4] Que tengas (SUB) suerte.

「幸運に恵まれますように」

⁶ queは省略も可能。

2.2. 「目的を表す副詞節」

- para que • a fin de que
- de manera que • de modo que 「～するように」

[例文 5] Volveré a explicárselo para que entiendan (SUB) mejor.

「よりよくご理解頂けるように、再度ご説明いたします。」

【「ヨウナ」相当語句の例】

2.3. 「非特定の関係詞節」

先行詞が不特定の場合、関係詞に導かれる形容詞節中では接続法が用いられる。

[例文 6] Buscamos una casa que esté (SUB) cerca del mar.

「私たちは海の近くにある家を探しています。」

Cf. [例文 7] Buscamos una casa que está (IND) cerca del mar.

「私たちは海の近くにある家を探しています。」

例文 6 と例文 7 の違いは、先行詞の特定性である。話し手の頭の中では特定済、かつ聞き手も特定可能性のある「あのお宅」(特定)であれば直説法、「海辺にあるような家(がもしあれば):非特定」ならば接続法が使用されるという点である。

3. 和佐(2005)の定義:「接続法とは『命題の真偽判断を避けるモダリティ』の表示形式」

3.1. 「事実⁷に対する話し手の感情表現」における接続法

従来 of 基準では説明が難しかった「Realis の事態に対する感情表現」についても、和佐は、発話における話し手の主眼の位置、即ち主眼はあくまでも主節の感情表現であり、命題の真偽についての議論はないため、従属節は接続法の使用により「背景化」しているという情報構造の観点から、接続法が選択される旨を説明している。(例文下線部:話し手の主眼)

[例文 8] Me alegro de que hayas (SUB) venido.

「君が来てくれて私は嬉しいです。」

[例文 9] Siento que haya (SUB) fallecido.

「彼が亡くなったことを私は残念に思います。」

[例文 10] Me preocupa que la bolsa haya (SUB) bajado.

「株価が暴落したことを私は心配しています。」

⁷ ここでは「Realis の事態」の意である。

これに対し、補文命題が真であるという内容伝達を必要とする場合（真偽判断のモダリティ表現）、従属節内での直説法の使用により、命題が「前置化」される。

[例文 11] - ¿Qué pasa? ¿Te preocupa algo? 「どうしたの。何かあったんですか。」
- Me preocupa que la bolsa ha (IND) bajado.

「株価が暴落したことを私は心配しています。」

Aunque⁸による譲歩表現についても、話し手が命題を真だと認めたくない場合、Realis の事態であっても接続法が使用されている例も存在する。

[例文 12] Aunque te rías (SUB), yo le creo.

「たとえあなたが笑おうと、私は彼を信じているの。」

[例文 13] Aunque llueve (IND), saldremos.

「雨が降っていますが、出かけましょう。」

[例文 14] Aunque llueva (SUB), saldremos.

「雨が降るとしても、出かけましょう。」

[例文 15] Aunque soy (IND) español, no me gustan los toros. (前半・後半ともに主張) 「私はスペイン人です。しかし闘牛は好きではありません。

[例文 16] Aunque sea (SUB) español, no me gustan los toros. (断定の和らげ)
「私はスペイン人なのに、闘牛は好きではありません。」

[例文 17] Siento⁹ que se va (IND). 「彼が立ち去る気配を感じている。」(知覚動詞)

[例文 18] Siento que se vaya (SUB). 「彼が去ってしまうのは残念です」(感情表現)

[例文 19] Dígale que se vaya (SUB) de aquí.

「ここから出ていくように、彼に言って下さい。」(話者の意思：間接命令文)

[例文 20] Dígale que enseguida voy (IND).

「私はすぐに参りますと、彼に言って下さい。」(情報伝達)

以上、従属節中の命題表現において、接続法 / 直説法の両者の出現が可能、即ち叙法選択の可能性のある例を紹介した。前述の例をふまえ、和佐は接続法が使用される命題内容として、以下の4つの場合を提示している

⁸ 譲歩の接続詞。(英：even if)

⁹ 動詞 sentir(英：to feel, to be sorry)、直説法現在1人称単数形。後続の従属節が直説法だと「感じる」、接続法の場合は「残念だ」の意味になる。

【接続法が使用される命題内容】

- ①話し手の想像によるもの
- ②もともと真偽判断が関与しないもの
- ③話し手がその命題を情報として伝えることを主眼としないもの
- ④真であるとわかっているにもかかわらず話し手がそれを認めたくないもの

4. まとめ

本論のまとめとしては、以下の3点が挙げられる。

1. 日本語話者に対するスペイン語の叙法選択を教示する際に、従来の基準である実現性の度合い (Realis/Irrealis) や話し手の主張の有無、特定 / 非特定の各基準に加えて、和佐の提唱する「命題の真偽判断を避けるモダリティ」に基づき、「話し手の断言 / 言明意思の有無」も4番目の基準として提示する効果が期待できそうである。
2. 従来の叙法選択基準のみでは説明が難しいとされていた、従属節中の Realis の命題に対しても接続法が使用される感情表現等に関しては、「話し手の伝達内容の主眼がどちらにあるのか」に着目することで、説明が可能になる。
3. 尾上や和佐の論にもあるように、日本語の「未然形+ム」およびその現代語「(ヨ)ウ」と、スペイン語の接続法が表す「モダリティ」の両者間には、irrealis の概念を表示するという共通性が観察される、とは言えそうではあるが、現代日本語の「相当語」としての「ヨウニ・ヨウナ」の妥当性に関しては、もう少し慎重に、さらなる分析が要されるようである。

5. 今後の課題

第一に、筆者の日本語学およびモダリティ / 叙法に関する勉強不足が悔やまれる次第である。この方面の知見を養うとともに、将来的には今回の標準スペイン語における叙法選択の基準設定をもとに、スペイン語の様々な言語変種、とりわけ系統の異なる近隣言語との言語接触を経て、共時的のみならず通時的言語特徴を多分に有する「現代ユダヤスペイン語」等の移民言語における同現象についても、何らかの観察・分析を行ってみたいと目論んでいる。

6. 【参考文献】¹⁰

- ・尾上圭介 (2001) 『文法と意味』くろしお出版
- ・小林一宏 (2009) 『スペイン語 文法と実践』朝日出版社
- ・細川幸夫 (1991) 『スペイン語会話文法読本』三省堂
- ・三宅陽子 (2013) 「スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について: 「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因」(神戸市立外国語大

¹⁰ 未読分も含む。

学大学院博士学位論文)

URL <http://id.nii.ac.jp/1085/00001330/>

- 山田善郎 (1995) 『中級スペイン語文法』 白水社
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ』 くろしお出版
- Givón, Talmy(1994): Irrealis and the Subjunctive. *Studies in Language* 18-2, pp.265-337.
- Terrell, Tracy and Joan Hooper(1974): A Semantically based analysis of mood in Spanish. *Hispania* 57. pp.484-494

